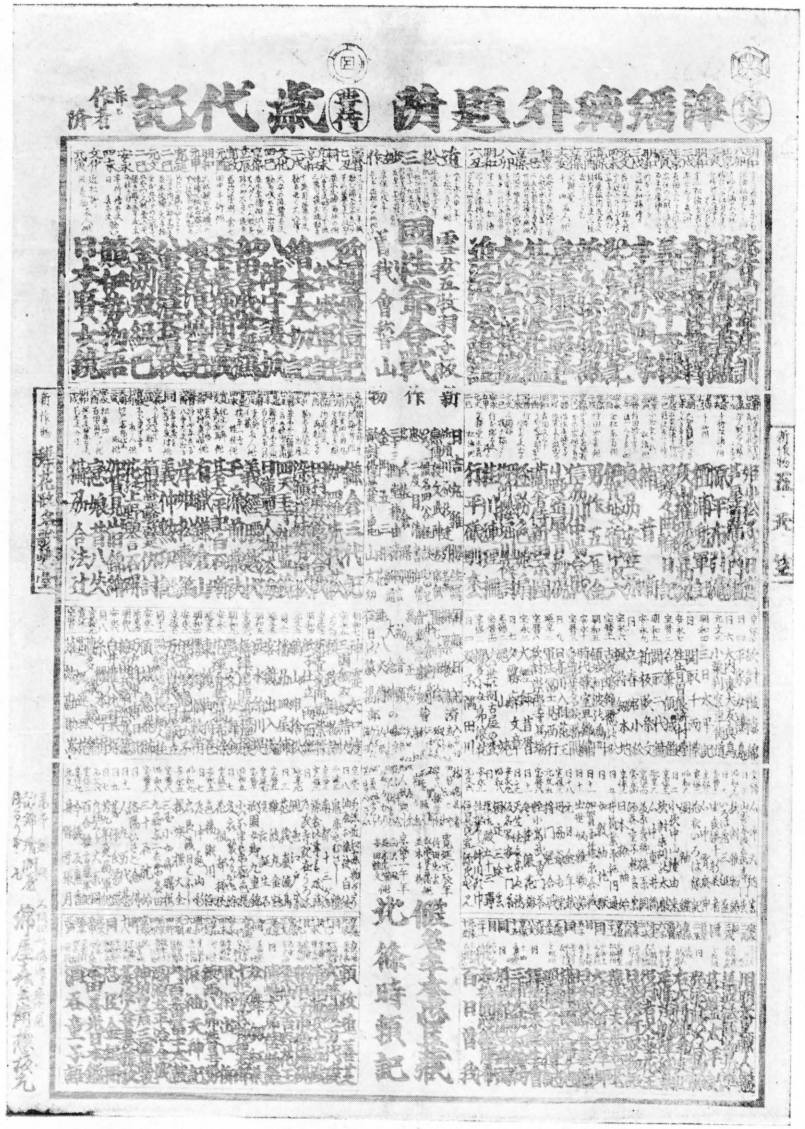
太棹

六月創刊號

昭和三年五月廿八日印刷納本
昭和三年六月一日發行（毎月一回一日發行）

東京 太棹社 發行

淨瑠璃外題附歲代記



（豐澤芳太郎氏所藏）

祝發刊

割烹

夷日

日本橋區通三丁目五番地

電話大手三二〇〇番

祝　發　刊

御辨當
幕の内
金ぶら
西洋料理
御料理

歌舞伎座
新橋演舞場
邦樂座

三芳食堂

京橋區采女町六番地
仕入部
吉田三芳
電話銀座三五四〇番

太棹創刊號（六月）

□表紙……岡本癖三郎

□はつ袷……孤村（一）

□發刊の辭……富取芳河士（二）

□義太夫の將來……中野三允（四）

近松秋江　巖谷小波　佐藤紅綠　馬場孤蝶　岡鬼太郎　白石實三　額田六幅　伊原青々園

□名士義太夫觀……畑耕一（八）

山崎紫紅　猿山儀三郎　上司小劍

□淨曲そゞろ言（一）……長谷川伸

□義太夫漫談……金森匏瓜

□淨瑠璃藝術の命脈……小酒井不木

□半兵衛の咳……土田杏村

□松のみどり……高木斐川

□實說心中調……黑顏老人（一六）

□佐太村と念佛……三宅孤軒（一八）

□先づ意表に出でよ……谷響居士（二二）

□捨小舟……病癖三醉（二四）

□祝辭と希望……豐澤松太郎稿（二五）

□若葉の郊外（三三）……柳川柳初松

□紅綠會短評（三五）……魚の會（三九）

□藝界寸話（四〇）……太棹俳壇（四一）

□太棹社義太夫會（四三）……（三九）

祝　發　刊

大日本因會

祝　發　刊

竹本津賀太夫

豐澤猿之助

祝　發　刊

東都五十義會

事務所

淺草區千束町二丁目四十一番地

杉山仲助方

電話淺草(84)一四〇〇番

祝　發　刊

東都五十義會

(順　ハ　ロ　イ)

理事長　巴仙　會計　千鶴

理事　一俵　理事　蝶花

同　市菊　同　勒

同　梅糸　同　其柳

同　初音　會計　三芳

同　峯水　理事　松樂

同　豐國　同　すみれ

祝　發　刊

梅本香伯

祝　發　刊

中澤巴

祝發刊

永澤喜鶴

祝發刊

岡崎盤洲

祝發刊

谷口響阿彌

安藤光樂

祝發刊

仁科和聲

豐田和十

祝　發　刊

星野桔梗

加藤二樂

祝　發　刊

近藤菊水

鈴木和樂

祝　發　刊

三井篁鳳

長谷川文久

祝　發　刊

猪谷銀水

遠田遠笑

祝　發　刊

宮島和紅

紺　我　笑

祝　發　刊

廣澤一志

和田春和

嶋うつぼ

榊原二見

平松あづま

祝　發　刊

木下松玉

金井仙玉

藤田其晶

淺原朝正

祝　發　刊

水魚會

榮其柳

春和

米花

師導　野澤道之助

祝　發　刊

赤坂

義太夫　紅　綠　會

師導　豊澤猿之助

幹事　松　の　や

祝　發　刊

新橋

義太夫　花びし會

乃ん龍　福三

花助　清六

常子　花代

桃之助　三かつ

松助　清二郎

夢之助　清八

ちよん太　歌丸

師導　野澤吉作

祝　發　刊

芳町

義太夫 勉强會

路之助
富八
豊三
小つな
越三
長八

師導 豊澤猿之助

祝　發　刊

淺草

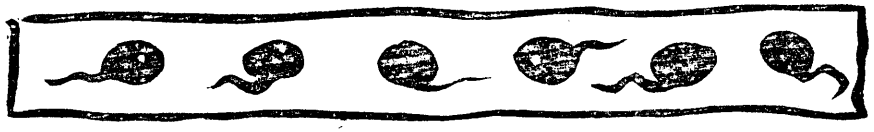
義太夫 音女會

富之助　八重吉
仲吉　語三
かきつ　登女助
紋之助　富千代
筆助　仲勇
綾香　力若
石之助　小時
幸次郎　桃太郎

はつ袷

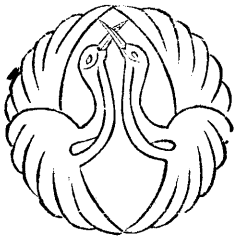
孤村生

今はただ名のみ殘りて蜆川治兵衞が涙くむ人もなし
振袖のお半背負ひし長右衞門かかるためしの數おほき世や
順禮のうたふふだらぐ寄席はねて朝太夫をおもひおつるをおもふ
お染久松「ラヂオ」でききて若かりし小土佐の姿おもひいだしぬ
壺坂のお里のごとき女房あらばわれも貧苦をいとはざらめや
泣き伏せし女義の簪落ちたれど拾ふべき熱今はさめたり
義理たててからの簞笥に二人の子まもるおさんに涙ぐまるゝ
何處やらのきやりの三味に夜はふけて濱町の宿ゆめさめにけり
いつしかにまぶたあつかり何時しかになみだながるるおつるとおゆみ
春の夜のそそろあるきにつれ彈の野崎のおくりなつかしきかな



於各博覽會共進會金銀賞牌受領

絹張繪日傘
意匠登錄 鈴付舞日傘



東京市京橋區東仲通南鞘町
雨傘問屋 武市屋
電話京橋(56)五三一九番
同四谷五〇五一番
振替東京三三一六九番

發刊の辭

冨取芳河士

本誌を發刊するの趣旨は、專ら吾古典的優等藝術たる義太夫の穿微的研究と其振興普及とにあります。

毎日の新聞記事を御覽なさい。其處には厭く事なき階級鬪爭や、血腥き殺傷事件が何時でも滿載されてあつて、吾々の純潔の生活は脅威され吾々の頭腦は終始攪き亂されないでは居ないのであります。斯くの如き社會狀態に直面してる人では少しも生色がない、お終には吾々も何時かしら其渦中に捲き込まれるんではなからうかと、頗る危惧の念に堪えないのであります。

實に考へれば考へる程竦然たる譯で、是非共一味の清涼劑を與へて、こういふ危險區域から脫出する樣に心掛けねばならぬ。其清涼劑は何が一番いゝかと云へば、何れも一長一短があつて取捨各異にするが、私は聲律諧調一糸紊るゝ所なく、四百年來傳統的の美文美曲を以て誇る義太夫の稽古を以て、尤上の藝術努力に適してると斷言するのであります。

世に懷中都々逸なるものがあります、三絃に和して唯無聲首を伸縮する模疑藝術もあります、義太夫界にも近所の手前や地位の相違等を苦にして、好きな藝術を懷中に密藏する人が多いやうだが、實に無駄な苦勞であります。

抑も稽古所に出入すると、音樂學校に通學すると、無意義に於て何の差異かありませう、何の軒輊かありませう、若し藝術至上主義を考へたなら、電車の中で「今頃は半七さん」と唸つたとて何んの疼しき所もありません。近來市中に喧號される顫聲奇音のバー式謠歌が跋扈して、滿都の士女爭つて是を學び知らざるを恥とする樣な有樣は、實に慨嘆に堪えないことであります。我邦固有の義太夫の稽古を憚り、御本人さへ譯の分らない蠻歌を高唱して怖れぬ理由は、要するに吾國民の其根底に觸れもせで、徒らに新奇に趨る惡癖でありませう、私は此惡癖を排斥し、眞個の藝術に近づかうとする同好諸君の前に本誌を發刊して、此國難時代に清涼劑を與へんとするものであります。果して一喫其甘味を享受せらるゝかどうか。從つて本誌としては、外廓に於て僞美を裝ふよりは內容の充實を旨と致します。即ち、始めから聲を嗄らしてしまふよりは、縷々として盡きない刊出を貴重するものであります。

義太夫の將來

中野三允

義太夫の將來……？？？、大問題である、決して輕卒なる主義を試むべきでない、乍併之れを自然の成行にのみ放任するに於ては、その運命は縮まるのみであること勿論だ、所謂音樂の司、元祿、享保の情緒を端的に味ひ得る藝術をして蠟燭のしんの燃に盡くる如くに消滅せしむるは、日本國民として義太夫そのものを知ると知らざるとに論なく、果して堪へ得る處であらうか。

余は大正十四年以來大阪に行かぬ程、大阪に疎緣であるが、乍併大阪に行けば必らず文樂を訪ふことを忘れない、それが休みでない限りは……而かも初めて文樂に行つたのは明治三十五年九月故松村鬼史の案內であつた、鬼史の父なる人は大納言なる名を以て素義界にはばを利かしてゐたのだが、それは別として攝津大椽、津太夫等の至藝に傾聽した、此の文樂が今日一向に振はぬと聞いては寔に今昔の感に堪へぬと共に、女義太夫の定席であつた播重が疾くの昔に落語等の色物席と變つた前轍に鑑み、痛心措く能はざるものがある。

昭和元年十一月二十九日、夕刊の東京朝日新聞に大阪電話として「二十九日午前十一時十分、大阪市東區淡路町五丁目御靈神社境內文樂座の二階正面見物席上の天井裏から出火し、火は忽ちの內に天井裏全體に燃え廣がり、直に舞臺から樂屋に移つたが、またゝく間に全建築を燒盡し火焰は更に北側の御靈神社本殿の藁屋根に延燒し之れも見る〳〵間に燒き盡し更に文樂座前の小路を隔てゝ……云々……吉野同座主任は出火と聞いて直に出先きより駈けつけ、殆んど殘骸を止めぬ文樂座を見て男泣き暫くは言葉も發し得なかつた」……と、日本に否世界には唯一つの完成せる藝術として、大阪と云へる土地の一切の嫌味を差引いて、尙餘りある價値を存する文樂に大阪人の足が向かぬとあるならば、寧ろ英斷を以て全燒後再建築にかゝらぬか、再建築したとしても、其の時興行の方針を改めた方がよかつたのだ。

一体どうして大阪の人士が文樂を顧みぬのだらう攝津や元の津太夫を承けての技倆あるものゝ出ないのは淋しいが、人氣が殆ど悉く雁治郎の芝居に吸收されてるのが最大の原因であるさうだ、成る程雁治郎はうまい、そこで雁治郎を崇拜するは結構な話しだ、併し雁治郎の得意とする出し物で義太夫から引離すことの出來ぬものが多々ある、即ち屢々演ぜらるゝ河內屋の如きに對し、雁治郎鑑賞眼はただ其の優さ型なふるまいのみに陶醉し了るべからずして、一方そのチョボに待つ所あるに思を及ぼしたなら雁治郎最負も又文樂を忘るゝの愚なるを悟るであらう

此頃文樂を大阪から東京へ移したらと云ふ說を聽く、大阪人士が如何にしても、文樂を棄てゝ顧みぬとすれば、是れ又一策たるを失はぬ、東京人士が進んで奪ふに非ずして、大阪人士が却つて文樂を荷厄介にしてゐる時に爲すべきだ、御霊の建物の中の空氣には別種の味がある、余は出來得るならば未來永遠に文樂を彼處に置きたい、大阪角力が東京の角力に合併したとは譯が違ふ、近松を出した大阪が文樂を東京に取られるのは大なる恥辱だ。

浪花節の故雲右衞門が東京へ來て本鄕座で旗上げをした時は大阪朝日新聞後援と云ふことが特に吹聽されてあつたが、文樂の後援は先づ大阪の新聞雜誌が總がかりでやるがよいと思ふ。

同時に語り手も糸も一層眞劍で、舞臺で倒れるまでの覺悟をして藝の上達を計らねばいけない、畢竟は何といつても藝そのものが下手ではおしまひだ、

文樂を以て義太夫の總本家となし、義太夫を以て營業とする者には一般文樂から免狀を出すことにしたら何うであらう、勿論文樂の免狀を持たずとも營業は差支ないが、世間に對する信用が違ふやうになるまでその威信を保たせたい。

文樂の問題は一先づ打切て、扨て義太夫の普及し

就て說をなすものがある曰く

從來の淨瑠璃は文章もよく、節も洗練され、藝術としては渾然たるものであるが、德川幕府の壓迫で或は豐臣時代の事蹟を鎌倉に作して書卸して、あるので今の若い人達への普及性が缺けてゐる、故に聽衆は年輩者が主となつて義太夫節は恰も演藝界の骨董品の如くに見做されて來た。

右の意見には漫然贊成したいやうな氣もするが、よく考へると要領を得て居らぬ、第一に此の意見は時代物の一部に通用するだけで、世話物とは無關係だ、それから時代を異にするとした處で、別に歷史の研究をする次第でないのだから、その爲に若い人達への普及性を缺くとは思はれない、赤穗義士の仇討を足利の時代にした處で、忠臣藏は芝居では今も尙はやるではないか。

今から三十年の昔である、牛込の和良店亭に綾賴太夫がかゝつた時、三十三間堂の出し物だつたと思ふ、「それは野干の年古る身、我は元より草木の」云々とある處で前の方に居た當時の所謂衣は肝に到る底のドースル連に緣遠い書生達が語り手に聞えよがしにソンナ馬鹿なことがあるものかと、高聲に幾度も幾度も繰返したのを苦々敷感ぜられて、かゝる手合は聽きに來なければよいにと思つたのである、豐臣時代の歷史が鎌倉時代になつてるから云々との說をなすものは、かゝる事實を何と判ずるか、聽きたいものだ。

去る三月東部聲義會の演奏を日本橋人形町の日鮮會館の五階で聽いた、歸る時エレベーターの昇つて來るのが遲いので、四階まで階段を下りると、四階の室のドアが開いて、そこからケバケバしく着飾つた若い女が一人何とか大きな聲で室の中へ言ひながら三階の方へと急いで降りて行つた、よく見ると四階の室はダンス場で、今の女はダンスガールなのだ、そこへ下からエレベーターが來て若い洋服の男が三人、ホールのドアを開けて中に消えた、五階が義太夫四階がダンス、三階、二階はツイ調べなかつたが一番下は活動寫眞である、各室ドアを閉めきつた中には、一箇の統一せられたリズムがあるけれども、外部からは如何にも混亂せる時代と云ふ事が會得されるスヽして義太夫の將來は如何、更に稿を改めて論ずる事にする。(三、五、二)

難波戰記　三　允

德川時代の壓迫で豐臣時代の事蹟を鎌倉に作して書き卸す云々については「義太夫の將來」で一言したが、義太夫すらさうであるから、正史若くは正史を基礎とした物語本に至つては尙更の次第で、今其の一例として難波戰記を擧げて置く。

(秀賴卿上洛の事)蒙密に國家の安危を觀ずるに、古今の武將たる人天下を帥ゐるに、仁を以て民を從ふる時は世久し暴を以て世を從ふる時は世危し是故に人を制する者をば天是に福し、人を殺す者をば天是を禍すと云へり、爰に豐臣秀吉と云ふ人あり、其卑賤より出で、武威益々盛んにして、忽ち四海の逆浪を鎭め、天下を掌に握り、位從一位に至り、官攝政關白太政大臣を極む、故に民恐れ士是に從ふ、然れども天は仁なきを惡む、故に二代にして遂に滅亡す、其謂を尋ぬるに、慶長三年八月十八日秀吉薨御の後、世上薄氷を蹈むの所に、德川家康公仁を以て衆を撫で、武を以て士を挫ぎ給ふ故に、忽に靜謐しければ、彌秀吉の家續秀賴を輔佐し給ふ。恩を荷ひ德を戴く輩、招かざるに聚り來たりて追從しける形勢、風の草を偃すが如し冒頭が既に斯くの如きである、他は推して知るべしだ、余曾て「東京下谷名物名所」と題し、大本敎時代の「大正日々新聞」で發表した中に「上野東照宮」を豐臣を亡ぼした翌くる年に死んで德川の運は飽くまでもよかりき　三　允

と歌つたことがある、彼の鐘銘の文字に關東調伏の文句があると云ふので、不和を釀し、慶長十九年十月、大阪陣起て、十二月和議が成つた、之れを冬の陣と云ふ。舊詠

水鳥や濠埋めよとの和睦沙汰　三　允

翌くる元和元年、和議敗れて再ひ開戰となり、五月大阪城が陷り豐臣氏亡滅した、之を夏の陣と云ふ其翌元和二年四月家康は七十五歲で此世を去つたのだ、若し此大阪陣が家康沒後となつたら果してどんなものであつたらう……と思ふと德川の運のよかつたことが合點されるではないか。(三、五、四)

名士義太夫觀

（受信順）

一、お聽きになつた義太夫の御感想。
二、纖細のもの（例ば紙治の如き）と雄大のもの（太十の如き）と何れが御好きですか。
三、御聽きになつた折の思出。

近松秋江

私共中國地方では、義太夫と申さず、ただ單に淨瑠璃と呼びならはしてゐました。その淨瑠璃は私にとりて、ほとんどクラドルソング（搖籠歌）でありました。私の父は、私が七八歳の頃宵のうちから蚊帳の中に入つて寢てゐますと、その蚊帳の外で夕涼みの席で、よく淨瑠璃を稽古してゐたのを記憶してゐます。

語り物は、政岡忠義、寺小屋などが得意であつたやうです。子供は子供に興味を持つもので、よく私の直ぐ上の兄などと「その菓子ほしいと、ひつ捉み……」などいつて笑ひながら、人の持つてゐる菓子を不意に奪ひ取つて口の中に放り込みながら「その菓子ほしいと引捉み」といつて笑つてゐました。

私の父の所によく來た、いはば父の子分のやうな人間で面白い人間がありました。その人間はよく阿漕を語つてゐました。

「ひらと平（へい）との讀み違え、ぬいで棄てたる笠じるし」といふところを、何度やり直してゐました。

私も生活が樂な境涯であつたら、淨瑠璃――義太夫情調に浸つて老後を送りたいと思ひます。

義太夫のある物を聽いてゐると、不思議に古の京阪が上品なものに思はれます。

巖谷小波

一、何を聞いても一時間以上になると少々閉口致します。
二、私はやはり世話物の方が時代物より好きです
三、第一と同じです。

佐藤紅綠

一、義太夫は語るもので唄ふものでないと、昔から通人が言ふ、だが今日に於ては語る義太夫が衰へて唄ふ方が流行するだらう。散文が切詰めれば詩になり、詩は音樂になる。將來の義太夫はもつと樂音的に進まねばならぬ。

二、纖細と雄大の區別は當らず、近松の毛剃は雄大なれども亦纖細なり、要するに小生は双方を好む近松翁の作は聞いて面白く、人形に合せ見て更らに面白い。竹田出雲の作は聞くよりも人形と並せ見る方が面白い。近松翁は詩味豐かで、竹田翁は舞臺の實演に成功して居る、前者は音樂的であり、後者は「動き」を主とす。

三、文樂座の保存は日本現下の一大急務である。啻に文藝上の問題でない、國家の大問題である。

馬場孤蝶

一、明治二十年頃から二十八年頃までが東京での女義太夫全盛期（從つて公衆的に云へば義太夫そのものゝ全盛期）であつた。攝津大椽の越路、及び太隅等が東京で大いに迎ひられたのも此の時代であるその時代の若い公衆に取つては、落語及び江戸音樂では餘りに洒落過ぎてゐて、耳遠いものであつたので、義太夫が決して古い音樂（文學）として觀られたのではなかつたのだ。而るに、今の大衆は言文一致の文章でなければ讀めないのだから、かういふ大衆には、義太夫は餘りに高等藝術過ぎてゐる。今の大

衆には浪花節以上のものは解らない。又これを他の方面から觀ると、何にしろ義太夫に表はれてゐる思想は、今日ではもう古いものだから、一般の若い人々の心を動すには足らぬ。つまり、義太夫（三味線音樂歌舞伎も同樣）は少數の愛好者の間に保存されることになるであらう。

二、時代物より世話物の方を面白しと思ふ。好んで聞くものは「新口」「吉田屋」「堀川」などなり。但し「太十」は三味線の手の雄渾なるを面白しと思ふ。

三、明治二十三、四年頃かと思ふが、攝津大椽（當時越路）を數回聽いたことがある。その時分の越路はもう幾分音量が減つてゐたといはれてゐたにも抱らず、實に美音であつた。「御殿」の「お末のわざ」以下のところの節廻しのよかつたことは今に忘れ得ない。「謙信館」も無論如何にも美しい語りであつた。その時越路の直ぐ前を語つた路太夫といふのがあつた。これは聲量がなかつたに抱らず、言葉のところの實にうまい太夫であつた。此の太夫の「河庄」の語り方の全く寫實的で面白かつたことは今も尙ほ耳底に殘つてゐる。その時分綾瀨といふもう餘程老年の太夫があつたが、この人はからだを少しも動かさず、見臺を叩きなどは少しもしない非常に上品な語り口であつた、それが古風な上品な語り方といふのであつたらう。

岡鬼太郎

先日は遠路御來訪下され候處不在にて失禮仕候其後更に御手紙にて御問合せに接し候については早速御返事可差上筈の處微恙療養の爲め豆相地方へ旅行昨夜歸宅仕候まゝ延引誠に恐入り候、偖御問合せの儀に候が小生が義太夫に興味を持ち候は大隅太夫世盛りの頃までにて其後は少しも聽きに參らず今更とかう申すべき資格も存じ寄りも無御座候まゝ乍折角御催しの上より御省き被下度右御返事旁々御願ひまで。

白石實三

私は幼時義太夫と常盤津をほんの少々稽古しましたが、學生時代は映畫のない時代とて寄席は第一の娯樂、二ヶ月にわたり連夜、ワラ店などへかよひました。昇之助の時代でしたが、朝重黨でした。彼女の「柳」「堀川」など、又、彼女の二重眼蓋の媚を含んだ艶なしほらしい眼ざしなど、いまに耳目を去りません。

好ましいもの非常に多う御座いますが、「柳」「堀川」「油屋おこん」「新口」好ましいものはいくらもあります。

くらうと〳〵といひますが、東京の娘義太夫にも非常に取柄がありませう。とにかく、義太夫の一人で、日本のウォーカル、ミューディクとして、大な價値をおきたく思ひます。長唄などもよいでせうがローマンスの歌曲として、依然、義太夫に價値をおきたく思ひます。

額田六福

太棹發刊の由、我々デン黨雙手をあげて贊成、祝意を表します。

當年の私の健康は義太夫によつて得たやうなものです。東京へ來てからは、いゝ師匠を知る機會がないので中止してゐます。

聞いても語つても大時代物です、世話はどうもいけません。從つて女義太夫はごめん、やつぱり文樂がいゝです。

伊原青々園

拜復　折角の御尋ねに候へども改めて申上げる事これなく候。

畑耕一

八九歳の頃文樂座で攝津大椽（その頃越路）の「堀川」をきいた事があります。子供心に纖美な聲だなと思ひました。それから道頓堀のどこの座でしたか、仁左衞門（その頃我當）と、我童（その頃土之助）等の出語りで、子役ばかり「野崎」をやつた事がありました。語りよりも役者のお道樂と云ふ事と土之助の美しいので、女に人氣のあつた事を今でも記憶してゐます。

山崎紫紅

一、近來にては二代目越路がよく、その前にては綾翁になつた綾瀨太夫をよく聞いたものでした。うまい人のは面白く、まづい人のはつまらないといふだけのこと。

二、どちらもよい、區別をつけろといふのは無理。

三、古靭の安達三、殊に切りになつてあの調子で雄大に語つたのを思ひ出す。

■ 猿山儀三郎

一、父が義太夫が好きなものですから、幼い時から子守唄のやうにいろ〳〵なのを聞いてゐました。繪本太閤記「尼ケ崎の段」とか、傾城阿波の鳴門「順禮の段」とか、お染久松「野崎村の段」とか、梅の由兵衛迎ひの駕籠「聚樂町の段」とか……。父は玄人の域を越ねてむしろ黑人だなぞとよく噂されました。そんなわけで、村芝居がかゝると、得意になつて出語をやつたものです。三味線も少しはやりました。これが父の唯一の道樂でした。

父のおはこは「本朝二十四孝」と「義經千本櫻」で、從つてこの二つは私の印象の最も深いものですとまれ義太夫を聞くと、若かつた父と自分の少年がなつかしく思ひ出されてたまりません。

二、極く甘いものが好きで、伊達娘戀緋鹿子、明烏六花曙、娘景清八島日記、繪本太閤記、お染久松、おしゆん傳兵衛とかですが名家の方々のをあまり聞いてゐませんから、これから芳河士さんのお伴をして日本の鄕土と人をよく歌つた義太夫を、大いに拜聽するつもりでをります。

■ 上司小劍

一、義太夫は一種の蔭芝居で蓄音器によつて音樂を聽くのと、稍ゝ似通つた點があります。いろ〳〵の人物の言葉が同一人の口により出るのは、活きた蓄音器ですが、最新の進歩した蓄音器から出る音樂ほどにうまくは行かないでも、とにかく人間がやるのですから、舞臺に出てゐる人物（人形にしても）の想像はよくつきます。さうして、芝居と云ふものが見たくなくなつた今日でも、上手な義太夫なら聽いてもよいと云ふ氣がしてゐます。しかし、新舊を通じて、劇といふものには、唾液を吐きかけたくもないと思ふまで、芝居見物の興味を失つた私は、近頃縁に繫がる義太夫にも、とかく氣が向きません。ただ一ヶ月に一度ぐらい蓄音器によつて、源太夫あたりを聽くことがあるくらゐです。聽いてゐると同じ蔭芝居でも、ラヂオドラマよりは義太夫の方が、さすがにズツトよい。

二、纖細なものゝ方が、概して好きです。

三、纖細なものではないが、呂昇の「日向島」を二十年も前に、本鄕の若竹で德田秋聲君と一緒に聽いたのが、いつまでも耳に殘つてゐます。其の後あまり誰れも語らぬものだから、でもありませうか。

■ 長谷川伸

一、紙治だつて、封切だつて、陣八だつて、太十だつて、節がある爲に作を沒分曉にされては耐らない。頭でわかつてゐて表現の出來ないのは、大分いゝ方として私は嫌はない。よき頭をよく表現してくれゝば、澁い物でも何でも、好きで極はめはしません。

二、少年の頃は古い〳〵播摩太夫の崇拜者でしたが、其の後はコレといふ崇拜者も持つ機縁がないので、隨つてだれの何といふやうな好みもなく、思ひ出もありません。先の大隅太夫だけは極く部分的に耳の底のどこかに殘つてゐて、外の人のを聽く時の邪魔になります。お尋ねとはみんな違つた事ばかりいふやうですが、ツレのはいるものは大抵、當分のジャズだつたと思ふやうに此頃なつてゐます。どうも義太夫の節、三味線は歷史的過去では確にジャズであつた。尠くとも同樣の傾向を持つた事と思はれます。

■ 金森馹瓜

一、私は、義太夫の文句が大好きで、いろ〳〵見て面白いと思つてゐますが、語りはあさり聞いたことがありませんから、別に感想といふ程のものはありません。ただ小清はうまいなアと思つたきりです

二、私は酒屋のさはり、今頃は半七さん、の所が大好きです。三味線は、柳、朝顏、の大井川などです。

三、小清の壺坂は、今でも頭へ殘つてゐます。

小酒井不木

一、越路太夫の「洒屋」が耳に殘つて居ります。朝重が好きでした。呂昇もわるくありません。先日土佐太夫の「朝顔日記」をきいて、いゝと思ひました。

二、つや物を好みます。身體の虛弱なせいかも知れません。ことに「さわり」を好みます。

三、先代大隅太夫の「堀川」のレコードをかけて喜んで居りますが、攝津大掾や大隅太夫を若いうちにきいて置かなかつたことを殘念に思ひます。先日名古屋の「文樂」を見て、何となく寂しい思ひが致しました。この方面の天才は出ないものでせうか。

土田杏村

もう殆ど一昔になりますが、私が京都へ來た頃、京都に人形淨瑠璃がありました。私はよくそれを見にいつたものです。もうそれもなくなつて、人形は文樂へ行かなければならなくなりましたが、(その文樂座も燒けましたが)斯うしたものをどうかして保存したいと思ひます。

義太夫で聞くのも好きです。東京で學生生活をしてゐた頃、本郷の何と云ふ座ですか、大學の前の白山によつた方にある寄席で、朝重をきいたのが不思議に今記憶に浮んで來ます。

纖細のものと雄大なものと、どちらが好きといふことはありません。そのときの自分の生活によります。

高木斐川

一、我が國在來の耳に訴へる藝術としては、何と言つても義太夫が一番洗練されたものと思ひます。あの太棹の力のこもつた、巾と深みと、何とも言へない旨味のある、それでゐて隨分復雜な音曲にしつくりはまつて、或は强く、或は弱く、或は細く、或は緩く、或は急に、義理と人情のもつれを、千變萬化の節まはしで語り出されるとき、私は、いつも哀愁を含んだ歡喜に浸つて、言ひ知れぬ感激を覺えます。

二、纖細なものには纖細な味ひがあり、雄大なものには雄大な趣があつて、私は何れをも棄てることが出來ません。といふよりも、實はそんな風に分けて、好き嫌ひを定めたくないのです。淨瑠璃の質とその節の優れたものは、何んなものでも好きなのです。

三、私は學生時代から義太夫が好きでした。と言つて女義太夫を追ひまはすほどの「何うする連」になつた覺えもありませんが、女義では友之助や素行や綾之助や小土佐などはよく聞いたものでした。だが松太郎の絲で朝太夫の艶物を聞くのは殊に嬉しかつたものです。大阪の人達のは殆んど聞いたことがありません。それでは餘り好きでもなく、義太夫を云々する資格がないと云はれるかも知れませんが、それは己むを得ません。自分では今でも義太夫に對して一種の愛着を感じてゐます。時々、胸のすつきりするやうないゝのが聞きたいと思ふほどです。ラヂオでは時々聞きますが、何うも寄席で聞くやうな譯にはゆかぬのが殘念です。御計劃は着々進めていただきたいものです。

岡本癖三醉氏より

癖三醉氏は病中推して本誌の表紙や挿畫をおかき下さつた方であります。

□

此頃の陽氣不順の爲め、頭の具合甚だよろしからず、御依頼の件も思はず大延引申譯ありませぬ。期日切迫に驚き急案でやつて見ました。何分にも勝手のちがふ方面の事で、趣向にも困りましたが、あまり拘泥せずによいかげんにやつて置きました、御用捨よろしく願ひます。挿畫も一つ二つやつて見やうとしても、これこそ趣向に種なく閉口しました。貴兄にて趣向を立て御註文あるならば、それはまた何とかして見ませう。

何しろ頭の調子がいけないので句も出來ませぬ、平に御推察を仰ぐ次第であります。

楓の葉となつた雨冷えも霽れた

四月二十六日　癖

淨曲そゞろ言（1）

黒顔老人

女義太夫（一）

近頃其方面にとんと遠ざかつてゐるので事新しくお談する材料の持合せもなく、又何分研究的に考へる時間もない爲に理屈めいた意見もありません。唯だ、無茶苦茶に此の義太夫といふやつが好きで、デーンといふ太棹の音〆を聞くと、スーッとする位な老人。むやみに一つその昔を憶ひ出して、暗やみの恥をあかるみへ出すことに致します。

先づ「女義太夫」といふ標題を書いてしまひましたから、極くお古い處、堂ずるの元祖めかして、明治も中頃時代の寄席廻りでも試みませう。伊井蓉峰君のお父さんへびらいさんが大層贔負にしてゐたといふ藝も達者に人氣もよかつた名古屋出の竹本蟬香なんて古い處は、名を聞いたゞけで高座を知りません。

拙者が始めて東京の寄席で義太夫といふものを聞いたのは竹本京枝といふお婆さんでありました。何しろそれまで許されてゐなかつた女義太夫の肩衣、袴は此の京枝が嚆矢だといふ事ですから、大變なわけのものです。淺草の東橋亭、神田の小川亭（今の天下堂のあと）それから九段のふじ本（今、佛敎の說敎所か何かになつてゐる處）などで大入（滿員とは言ひませんでした）を取つてゐました。一座には京駒、京峰、京照、京富などいふお弟子達が、何れも前を語つてゐたものです。

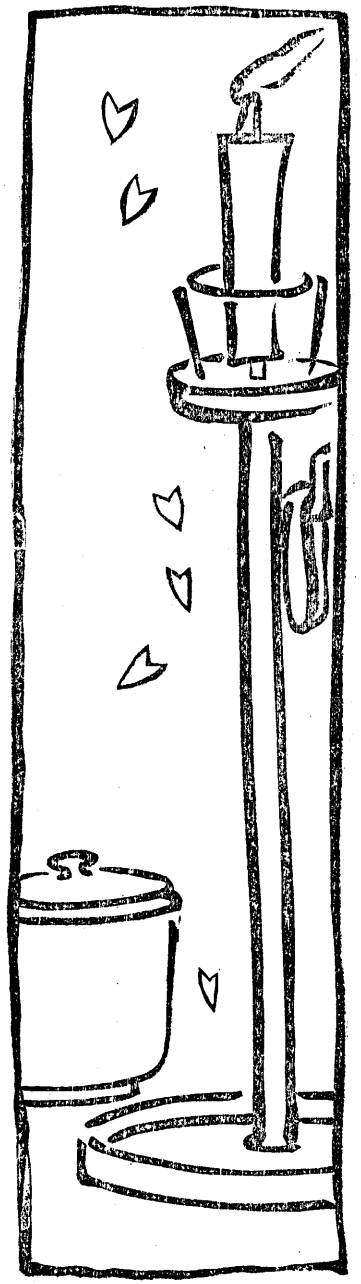
義太夫といへば東京では、其頃若い血氣な處で播磨太夫に綾瀨太夫といふ兩大關が、大きい澁いものと艶つぽい處と負けず劣らずの贔負々々で鳴らしてゐたもので、女義などは殆んど相手にされなかつたものでした。

京枝は名古屋から來たのでしたが、其中に大阪から湊琴といふ中年增が上つて來ました、續いて小傳といふ確かりした、大阪でも相當の顏弱れの人だと聞くのが迎へられた。それから美音の猿玉、美形の照吉などが續々とやつて來ました。

當時、京枝と相並んで横綱を張つた竹本東玉の上京はそれから間もなくでした。切前には小政といふ綺麗首、後に糸吉となつた東代玉、東溜玉、東糸、ずつと後に二代目東玉になつた東吉などはまだ口語りで、一門一座。それには東京の席亭で後ちに「睦」と稱するトラストが人氣を煽り、名人圓朝、鼻の圓遊、禽語樓小さん、談洲樓燕枝などの色物席を食むやうな急發展となりました。

その東玉一派と、どちらが早かつたか、根が江戸つ子の永らく大阪へ行つて住太夫の門に遊び叩き込んで來た負けぬ氣の藝達者、竹本小住が旗を擧げた一座には勘吉、播梅、勇治なんといふ腕達者を從へて、かなり花々しく打つて出ました。續いてこれも大阪から熊吉といふ上手が上つて來た。この熊吉は大阪で小住、猿玉、鳴吉と女義界の四天王と言はれたものといふ。江戸つ子の女義太夫としては、その時分鶴蝶といふのが現はれた。京都から鶴澤花友といふしつかりしたのが看板を見せた。

女義太夫の流行は漸く景氣を見せて、どこの席でも大入な事であつた。その頃木戸錢といつたのが金四錢位、色物も大體同じ事で、圓朝が累が淵をやるとか鹽原太助だとかいつて、前に一門の錚々たる處を使つて木戸が十錢であつた。大阪から越路が來る（後の攝津大椽）これがまた最初十錢位、少し後に僕は越路が本郷の若竹にかゝり、今度は二十五錢とるぜといつて驚きながら三晩か四晩、牛込から出かけたのを覺えてゐます。話は元へ、それから新看板として現はれたのは若吉改め三福、澁い語り口で、鏡山の長局だの、忠臣藏の九段目だの得意で語つた三福は、やがて素行と改名し、又た竹本瓢と改め、更らに戻りの素行になり堂々たる一枚看板となつたのが今も時折、JOAKでお聽きになるあの素行さんなのであります。此間亡くなつた小清さんの東上は、其の後の事でした。その間に女義界の中心人物として扱はねばならぬ竹本小土佐。竹本綾之助、竹本住之助、竹本越子等の花形出現、女義全盛。ドウスル連勃興時代に入るのであります。



義太夫漫談

三宅孤軒

僕は先天的に義太夫が好だ。――義太夫の好きな事を先天的と云ふのは少し突然すぎるやうだから、その譯を話さう――。それは斯うだ――。

僕は伊豫の西條の產れだ、松山から東へ十三里、海に近い小さい城下、城下と云つても紀州家の分れで三萬石、城も何も無い、言はゞ淋しい町に過ぎない。併し、それでも城下には違ひない、屋敷者、町家育ち、など云ふ言葉を、子供心に耳にした事を覺えて居るから。

そこには一軒の常小屋（芝居小屋の常設館の事、他は空地へ臨時に出來るのに對して、常設、即ち『常小屋』と呼んでゐる）があつた。そこはよく芝居が興行されたが、五度の內に三度までは、人形芝居であつた、町の人々は人形芝居と云へば、どれをでも『源之丞』と云つて居た、つまり『源之丞』は人形芝居の代名詞であつた、恐らくは今日でもそうだらうと思ふ。

僕は何にも知らぬ抱子（だきご）の時分から母にだかれて、此の芝居をよく見に行つて居たから、思ふに僕の產れぬ先も、イヤ、母がまだ娘時代からも、イヤ、其の母がまだ產れぬ先からも、この土地の人々には、此の芝居が何よりの樂しみであり、唯一の娛樂機關であるのだ、そうした血の流れを汲んでゐる僕だから、そこで『先天的』義太夫が好だ、と云へるのだ。

モウ一つある。それは年に何回か來る芝居の他に『阿波のデコ廻し』と云ふものが、一ヶ月の內に、何度となく、此の淋しい町に現はれて、軒から軒へと町中を流して歩いた、それは謂ふ所の傀儡師で、茶箱程の箱を左右に擔ふて、その中には、赤兒位の大きさの人形が幾つも入れてあつて、荷を肩にする天秤棒が、すぐに舞臺になつて、何人もの人形が、その天秤棒の線の上で芝居をするのだ、

『そりや聞こへません傳兵衛さん……』

傀儡師は口三昧線で上るりを語りながら人形を使ふ、何程かの鳥目を貰ふと、又軒づたいに次の家の前に荷を下して、三莊太夫が出る、次はいざり勝五郎が出る、先代萩の御殿が始まる、と云ふ風に、次から次へと流して行つた、そうした『一口上るり』の人形芝居、『デコ廻し』の跡を追ふて、六つ七つ時代の僕は、町から町へついて歩いた。

屋敷町へ行くと、或る家では格子戸の處に五寸釘（くぎ）へ『小錢』と呼ばれてゐた一厘錢を何程かさしておいてあるのを、デコ廻しは、デコを出さずに、『……玉手御前……』なぞと、例の『一口上るり』を語りながら、よい程に無斷で拔き取つて、次の軒へ移つて行つた、私はそれを不思議に眺めてゐた、この小錢はこうした物乞ひの爲に、出して置くので、勿論なくなると又さして置くのであつた。

先天的に享けた義太夫好きの血は、斯うして後天的にも發達？を遂げて來た。

小學校を出ると伊豫から東京に移り住んだ、そうして十七八の頃には、立派に不良性を帶びて娘義太夫の跡を追ひ廻してゐた、初代綾之助、素行、朝太夫などを覺えてゐる、中にも僕は素行の『小磯ヶ原』

がすきで、新聞の『語り物』を見ては、どんな遠方でも出掛けたものだ。

それから後、大阪から『組幸』と云ふ女義太夫が來て相當人氣があつた、僕はその三枚目を語つてゐる『峰子』と云ふ女が好きで、寒い時雨の晩などもいとはずに、寄席の裏木戸で峰子の歸るのを待ち合はせたりした。

その頃は例の『どうする連』といふものが娘義太夫の付きものだつた、勿論僕も其の一人で、今にして思へば冷汗の出るやうな譯だが、當時は一切夢中、『どうする〳〵』と一座の爲めに、一と晩に寄席を三四軒も飛び歩く騒ぎだつた。丁度、其の頃、この『どうする連』とは反對に一人の『大出來ぢいさん』がゐた、それは兜町の取引所の某店の隱居さんで、熱心な定連の一人だつた、その老人は、義太夫が一段すんで、御簾が下りる時に、破鐘のやうな大聲で『大出來！』とどなるのであつた、それは丁度、國技館で『常の花！』と聲援するやうな調子であつた、僕は或る日、やくしの宮松（詳しくは茅場町の宮松亭）で、その大出來ぢいさんから、斯んなことを云はれた。

『兄イさん、お前さんたち、そうして毎日毎日、どうする、どうすると騒いでゐなさるが、末はお前さん達が、どうするつもりだ』

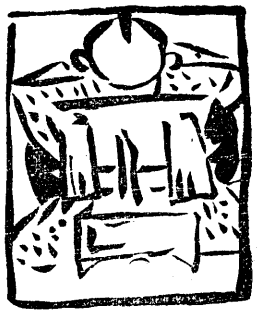
僕はハッとした、勿論『中入』のかき餅か何んかを嚙みながらの話だつたが、僕にはそれが大きな鐵槌のやうな氣がした。

以來僕は娘義太夫を聞かなくなつた。さうして『寄席と云へば、必らず『落語』か『講談』の方へ足を向けた、それは一つは其の頃から手をつけてゐた『俳句』の方が面白くなつたからであつた。

星霜こゝに二十餘年。今でも其の時の大出來ぢいさんの話が耳に殘つてゐる。

東西々々の事

總てお客樣の動聲を鎭むるに「東西々々」と言ふ事は、羅大經の著、鶴林玉露に見えたりと、橘庵漫筆に記してある。して見ると最古から、唐も倭も同一制止法として「東西々々」の語を用ゐたものと見える。



淨瑠璃藝術の命脈

谷響居士

淨瑠璃藝術の命脈は太夫の力にある乎、又院本文章の力にあるや、詳言すれば、節曲聲調の力にある乎、院本文章の力、即ち名文妙句の作者の力なるかと、云事也。

此事を攻究するは、現今の義太夫界に於て大に必要の問題也。而して此問題を進んで諦明せんと欲せば、先以て淨瑠璃藝術と、院本の文章とは同一体のものなるや、別種のものと觀ずべき乎、と云ふ事を講究せざるべからず。

或人曰く、院本文章が即ち淨瑠璃藝術也。此の藝術を分離して、文章のあるべき筈なし。何となれば院本の文章が何程の名文妙句なりとて、之を活躍する太夫の力なければ、文章は死物也。聲調と節曲の宜しきを得て、始めて淨瑠璃藝術と稱すべきもの也何故に之を別種となすべきか。と吾輩曰く、音調律呂整和して三絃に交響するは太夫の力也。名文を活躍して聽者の視聽に訴ふるも、又太夫の力也。然共之は是れ客觀的の見解、深く攻めざるの說也。主觀的に立入りて考案すれば、文章と節曲は別物也。換言すれば淨瑠璃節、即ち太夫藝術と、文章とは決して同一体と見るべきものに非ず。元來作者の文章は太夫の爲に書落したるものなれども、太夫の力足らずして、節調適當を失し、世界の人物を活躍し能はざれば、淨瑠璃藝術は死物也。されど夫れが爲に、作者の文章妙句は決して消滅すべきものに非ず。例へば淨瑠璃を一言も口にせざる者たりとも、淨瑠璃

文藝に趣味を持ち此文藝を講究して、一世怠らざる者あり。又作意文章の理解もなく、只淨瑠璃道樂として聲調節曲を修行して、一世を過ぎる者あり、此二者は一は淨瑠璃文藝家として、他は節調藝術の人也。即ち太夫藝術と、文章藝術とは、別種にして、同一体とすべきものに非ざる事明らか也。

如上の理由明らかなるに關はらず、現今義太夫節を修行する者、玄素を問はず此理に暗く、自我自贊して曰く、義太夫は名文也。此名文名句を語る、他藝と比肩すべき藝術に非ず。古來音曲の司と云ふ、敢て誇稱に非ずと。吾輩想ふに此言甚だ自省せざるの甚だしきもの、名文妙句は文章の力也、文章は作者の功也。作者の名文を節調して、之を活躍してこそ太夫藝術の誇りなり。文章作意も諦めず、不節調なる藝術を語り散して、作者の名文を誇唱す、之れは是れ恰も先祖の手柄高名を擧げて、自己の名譽に取り入れ、自力の足らざるを、先祖の名譽にすがりて辨護するものに非ずして何ぞや。淨瑠璃文章は素讀にして悲喜肺肝に徹する事あり。拙劣の太夫は節調して嘲笑を禁ぜざる事あり。例ば臺本を素讀して人世悲感の極を認めて天道樣聞へませんと、如何にも人世の行き詰りの愁嘆實に感慨骨にこたゆるを覺ゆる事あり。若し之を太夫が節曲して、三絃に合せ語る場合、聞へません〳〵〳〵と繰り返し繰り返しても尙嘲笑を禁ぜざることあり。素讀して感慨無量に打たるゝを節調して、却て嘲罵を招く、之れ何が故ぞ即ち文藝の力と、太夫の力の相應せざるの致す處ならずや。又入にけりと素讀にすれば夫迄なれども、太夫が節調して序送り、中送り等にて入にけりヲヽ、と太夫の音調の力にて、臺本以上に語り活してこそ始て義太夫藝術の力也。文藝の力を自己の藝術の如く思惟する太夫、玄素を問はず現代往々にして見る事あり。此理を究めざる甚だしき者と云はざるを得ず。想ふに現時の如き太夫の修行藝力にては人形藝術が天保前後の時より素淨瑠璃に棄てられたる如く淨瑠璃文藝に太夫藝術の置去りに遭遇する事、近き將來にあらん乎と思はる。太夫藝術將來の命脈、實に風前殘燈の感なき能はず、世情は己に義太夫藝術を棄てゝ近行しつゝあり、現代の識者は淨瑠璃文藝としての命脈は將來に認むるも、太夫の藝術は己に半ば忘るゝの時至れり。現代の人は淨瑠璃文藝は義太夫藝術を職とする、太夫其人よりヨリ以上に講究を進めつゝ來れり。院本の講究は文化、文政の昔より尙以上に進歩し居れり。太夫の藝術は明治の半に及ばず、太夫の藝術何を以て命脈をつながん。院本の名文に賴らんか、文藝は太夫の力を用ひずして獨歩して進みつゝあり。義太夫藝術は刻々に斷未魔に近づきつゝあり。

斯藝に趣味を持ち此藝の命脈をつながんと計る同好の人士(玄素を問はず)今にして大に講究を積み、發奮せざるに於ては、院本の名文妙句は或は他藝の財産に奪はれ、義太夫藝術の名目を美にして發達する如き事にならんかと思はる。

此時「太棹」の發行あり。元來太棹は義太夫藝術の母となりて、此藝を發育したるもの也。太棹の名目蓋し偶然に非ず。近時の義太夫界感慨禁ぜざる事あり。

聊か發刊を祝福して同好の諸君に呈す。

若葉の郊外

若葉の効外の清々しい氣分は格別であゑ。緣に饑えて居る都會人にとつて郊外の散策、遠足は何物にもまさる慰安であらう

季節柄堀切界隈への行樂は絶好とされてゐる、まづ東武電車で淺草驛から約十五分堀切驛に着く、荒川の清らかな流れは靜かに動き水面を傳ふ涼風は若葉の薫を含み風光絶佳、古來菖蒲の名所で知られてゐる同所は今なほ、むさし園、堀切、小高の三園があり、特にむさし園は花時には動物園、演藝館を園内に併設して遊園者に興をそへる由、もう盛りであらう。

この外日歸りの遠足地としては史上で有名な館林町や太田があり、一泊がけなら伊香保などが先づ恰好の地といはれ樣。

東武電車の沿線粕壁は、古來藤の名所として知られて居るが樹木が年齒を經るに從つて益々花は見事になり、房の長いのは地に着く程である。樹數は比較的尠ないが、何分一株で二百坪以上に擴がつた柵一面が一丈にも近い花房で覆はれて居るのだから、其美麗さは全く言語に絶する。晩春となり櫻にとうに散り、つゝじも遲目になつた此頃の粕壁の藤は、確かに天下獨歩の感があり、東京を初め各方面からの觀覽者が毎日殺到するといふ有樣、年々高貴な方々や知名の畫家詩人などの來遊する者も多い――が今年は外人の觀覽者も相當に多いとの事である、藤のある所は牛島といふ所であるが、ここまでは徒歩ででも大したことはなく、乘合自動車では僅かに十分位である。

▲半兵衛の咳▼

病癖三醉

ラヂオで聽いた米太夫の三勝を一寸評させて貰ふ。ラヂオの藝を云々するのは稍々眞面目を缺くがそんな六ケ敷いものぢやないのだ。總體匠氣の多分にある語り振りだと思ふた。新味を出すつもりの努力かも知れないが概して寫實的なのが氣になつた。クルシカルな藝術に變な現實暴露をかつぎ込まれるのは何の方面にも迷惑なものである。新らしい味は新しいものに新らしく生み出されるのがよろしい。古いものには古い所に古い味がある。こんな事は知れ切つた話である。然し世の中にはその知れ切つた話しがさつぱり理解されて居ない場合が澤山にある。米太夫に恩怨はないが感じたまゝを述べて平素の欝憤をはらす譯である。義太夫の眞實味などは間違ひの骨頂であると斷言する。こんな事を長々並べると米太夫を目標にして漫罵を濫發するやうで相すまぬから、こゝに一例を擧げて手とり早く切り上げる。それは半兵衛の咳を最も耳に障つたものとする半兵衛の咳入る具合はうまいものであつた。漫性氣管支擴張症患者の咳嗽發作としては眞に迫つたものであつた。咳入つて仕舞ひに滿口的喀痰する音聲まで聞かせる所は至れり盡せりであつた。これほどうまく眞似た半兵衛の咳は、然し義太夫としては前後に調和をかいたもので、耳障りと云はなければならぬ缺點であつた。義太夫の咳は何處までも義太夫の咳でなくてはなるまい。芝居の咳であつてはならぬ。芝居としては芝居の咳はこれまた芝居の咳でなくてはならぬ。實際の病床に呻吟してゐる咳そのまゝを持つて來るのは間違ひではあるまいか。義太夫に咳を寫實的に演出する苦心は、有害無益の努力として排斥するを當然と信ずる。こんな筆法は義太夫のノーマルな藝術とは申されぬかも知れない。唯あまりの見當違ひの無駄骨折りが、この事に限らぬ。この人にのみといふのではない、天下の滔々たる不見識として至る所に存在するを慨するの餘り、病人の癇癪として飛んだとばちりをはねかした次第である。今晩はこれでさようなら、JOAK。

祝發刊

東都聲義會

理事長　昇

（順ハロイ）

叶　語　樂

會計　團　三　幸

同　雲　榮

峰　昇

立　水　銀　水

和　昇　喜　代　子

風　雀

松　寶

祝　發　刊

東都聲義會

女子部

（順ハロイ）

悅子　叶琴歌子　喜代子　龜好

祝　發　刊

竹韻會

（順ハロイ）

鈴木一朝　鈴木一信　松尾武市　熊取谷たもつ　保々長平

祝　發　刊

八木小石

號　石泉

大阪市住吉區天王寺町
千四百八十番地
電話天王寺二八二〇番

祝　發　刊

川口初音

自宅　大阪市南區玉屋町四四
電話　南二二一七番

祝　發　刊

東京義太夫
世話掛
睦會

會長　米子
幹事　いさみ
會計　玉次郎
庶務　千島
相談役　三昇
同　小米

國松　小葉清　二平　林壽　八

都　菊水　小初　呂知　やまだ　清昇　秋孝　謙治　徳二　いと　千代田　千登世

中付六

祝　發　刊

祝發刊
壽成長

涙花名物　淨瑠璃雜誌社
社長　樋口吾笑

中付七

祝　發　刊

斯界最高權威と賞讃さるゝ

淨瑠璃世界は

▼既に號數二百九十四號に達し、その記事に、內容に苦心に苦心を重ねて、二十年一日の如く正々堂々と發行を續け、その議論と批評は常に斯道の羅針盤となつて居ります。

而も本誌は昨春來行き詰れる淨瑠璃に一の暗示を與ふべく新作淨曲を掲げて絕大の讃辭を蒙つて居りますが、まだ〳〵何か斯界のためになる事をしたいと思つて居ります。

之が主幹は以前の「演藝倶樂部」「文藝倶樂部」「生活」「新小說」「娛樂世界」其他の雜誌に劇評、雜文等を寄稿した小說「硝彈片」戲曲の研究「傳說の都」の著者石井琴水です。

本誌の定價一部三十錢、六部（半年）壹圓六十錢、十二部（一年）參圓（郵稅一部五厘）。

發行所　京都紫野南舟岡町八八　淨瑠璃世界社

中付八

祝　發　刊

義太夫唄三絃司

菊岡號　家

平（タイラ）五（ゴ）輔（スケ）

東京市淺草區駒形町四番地

電話淺草(84)四八五七番

中付九

祝　發　刊

貸席

入谷倶樂部

東京市下谷區入谷町三九七
電話下谷二二二二九番

祝　發　刊

貸席
撞球

龜甲倶樂部

東京市深川區黑江町二六
電話本所(73)四一〇六番

祝　發　刊

□創立三十年

一、手輕御料理　淺草公園

一、天ぷら　一仙亭

一、壽し　號巴仙

電話淺草一四〇〇番

□淺草御散策の節は是非御立寄被下度候

祝　發　刊

日本橋區交叉點際

甚兵衛

電話日本橋(24)二七三二番
二七三三番

安くて

うまい

御料理

銀座支店

銀座尾張町西仲通

電話銀座(57)五五一一番

祝　發　刊

御進物用として——まき物、其他一切御用命に依り御相談致します。

御祝ひ、宴會、運動會、おさらひの

各宮家御用達

雀壽し本店

大阪壽しは雀壽しへ
御用命願上候

小泉嘉六

日本橋區佐内町五番地
電話日本橋(24)一四三八番
一四三九番

中付一四

祝　發　刊

大阪生粋

關東煮　あさあ

日本橋區通貳丁目
式部小路

外に
小料理いろ〳〵

俳名　い　大

電話日本橋(24)三九七二番

中付一五

祝　發　刊

日本橋區浪花町五番地

平松

電話浪花 五五二五番
五六九二番

御待合

伊豆熱海旭町

平松支店

電話熱海五一二二番

祝　發　刊

本郷區千駄木町一六三番地

貸席　喜久本倶樂部

電話小石川85六五二二番

小石川區八千代町三八番地

貸席　小石川倶樂部

電話小石川85六七〇九番

日本橋區北島町二丁目二番地

貸席　お喜奈倶樂部

電話茅場町五四六番

神田區五軒町一三番地

貸席　祇園倶樂部

電話下谷83一〇七八番

祝　發　刊

牛込區若宮町一四番地
城戸美登里
電話牛込一五五三番

深川區常盤町一丁目七番地
貸席　常盤倶樂部
電話本所73二五七六番

義太夫研究之權威
九洲素義界
毎月一回十五日發行
一ケ年前金三圓六錢
內容
淨瑠璃文章之解說と註釋、淨瑠璃會報並に講評と批評讀者欄、淨瑠璃難句の解答
特別執筆者　竹本土佐太夫
淨瑠璃五友
發行所　九州素義界社
久留米市本局前
電話九三四番
振替福岡八八三二番

豐澤松太郎秘藏

松のみどり（一）

禁轉載並に無斷講演

□

本文は作者不詳の古文体で、義太夫を學ぶ人の最も尊重すべきものであつて、曩に、松太郎師門下の師恩會で、本章書き本全部を印刷し、非賣品として各自に頒布することに原稿も出來上りました處不幸震災の爲め原稿は全く燒失してしまひ、當時關係の人々の今に千秋の恨事とする所であります。

依て豫告の如く、松太郎師節づくし發表の順序として、此の「松のみどり」を本號より連載します。讀者の喝采を博する事多大なりと信じます。

壽五節の舞姫

謹按するに、皇御君天津日嗣し御位に御登りましまし、繼で天祖に供する大嘗の御儀を行はせ給ふ、御式典を濟せ奉り、御代萬代と御祝の其宴場に於て、古式の歌舞御催させ給ふ、即ち粂舞、五節舞、太平樂、萬歳樂等なり。

右之内五節舞とは恐れ有とも、右淨瑠璃秘曲節中に保存しあれば、茲に珍重して記し置なり。

備考―五節舞に就ての古書に載する所左の如し。

「本朝月令」曰、清見原天皇御二吉野宮一日暮彈レ琴有レ興俄再之間前岫之下雲氣急起疑如二高唐神女一髣髴應レ曲而舞獨入レ膽他人無二見人一擧レ袖五替謂二之五節一云是則天人也。

「長門本平家物語」云、五節の宴醉と申は、昔清見原の天皇の御時より始まれり、清見原の天皇と申は天智天皇の御弟也、御門讓りを受けさせ給ふべきにてましましけるに、大伴の皇子のなんを恐れ、髪を剪て出家と名つけて吉野の奥に籠らせたまひけり、清見原と申所に住せ給ひけるによりて、其所をつがせ給ふ、心を澄せ給ひ吉野川の水上にして、琴をひかせ給ひしに、神女天より天下り

乙女子かおとめさひすもから玉の
おとめさひすも其から玉を

五聲うたひ五度袖を飜す、是ぞ五節の初めなる、扨御門是を御覽じとゞめさせ給ひて、御卽位の時、其御業を學ばせ給ふ、今の五節是也けり。

音曲文章

壽五節舞姫

抑五節の濫觴を。尋るに。昔人皇四十代。清見原の天皇の御宇かとよ。大和の國み吉野や。よしのの宮にましますとき。日暮に琴を弦玉ふ。折しもお前の山岫に。忽おこる。合八重雲の中にたつなる。神女あり。合琴の秘曲にしゝらひて。五度袖をひるがへす。其れから玉の緒も絶ず今に。傳へて行なはる。先正月は初若菜君が爲迚春の野の。雲間を。分けて諸人の摘て祭れる七草の。其數々は何々ぞ。實にや歌にも芹。薺。蘩蔞靜。草繁。佛の座。合菘。蘿蔔。摘添て。七種の弼の和らかに治る。國の國ぶりや、彌生は。曲水。雛祭り。桃の酒にも醉たかく。空も照そふ。夕月の。光りをうつす御溝水。流れて廻る盃の。數も限らぬ御遊。今も昔を。三千歳に。なるてふ桃の陽々と。女雛男雛の妹脊

の川波。合立子這子のならはしも。世にむつまじき例とかや。五月五日は。菖蒲ふく。軒端に。薫る露雫。萬代かけて藥玉の。玉の。飾りも色々の糸組さげて奉る。扨又幟は其昔。光仁帝のおん時。合蒙古の賊船數千船。鯨波を作りて漕來る。合早良親王大將にて。是を討んと紫や。合藤の森の御社に。祈をかけていさましく。既に出陣ましましき。時に神風吹起つて數多賊船ちり〳〵に散て。行衛はしら波の。音斗こそ。殘りけり。其月五日の事なれば。其例をも引こかや。餝る兜や籏指物。風になびきてへんほんとけふも武國の。しるしかや。又文月は七日の夜。乞巧奠沖祭あり。彼。唐土に名も高き。ゆうしはくよふ夫婦の者。明けくれ月を念し宛。終に天上に化を請て。牽牛織女と。あらはれいて。二上り光りをかはすぎん河の水。深き契りは幾秋も。合替らで渡す鵲の橋よ。露の玉橋たまさかに。逢ふ夜は扨も恥しや。顔は赤らむ紅葉の橋に。秋風吹な吹な秋風つれなく色も。色もつれなく替るな替らじ。ねやの睦言むつまじく。又の逢瀬を結ぶの糸の。世に絶せぬ。祭とかや。ウキン御代長月は菊のせく。菊の酒をも呑やうたいや。八百餘歳の齡をも。のぶると菊の露の玉。かさしの菊は數々の星の光りこかゞやかん。玉の榮は萬歳萬々歳と祝ひ。壽き舞ひ納む。

實說心中調

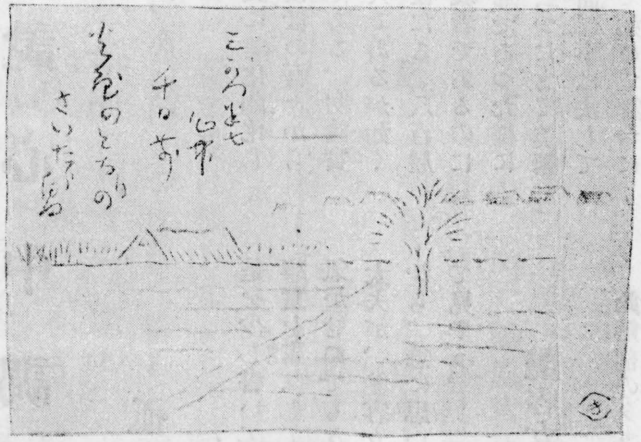
孤村生

實在のモデルを潤色してどういふ風に美化劇化したか、近松巢林子や紀海音の技巧を後世の吾々から窺ふには其原泉を尋ねて見るも一興である、勿論實說と院本とは恰も水死婦人が悉く美人であるが如く又心中二つ腹帶のお千代半兵衛の敵役たる、八百屋の憎まれ婆が、實際は念佛三昧の律義者であるのに却て親爺が嫁に迄口說く樣な色魔老爺であつた樣に根本から相異して居るのが多い、と云つたとて美術は寫實計りではない、事實其儘の三面記事は決して藝術の領域ではない、美化し脚色して始めて舞台に上せられるのであるから、實說がどうあらうと決して院本の價値に影響を少しも與へられては居らぬ、是を少し書いて見たいと思ふても、どうも詰らない事實を露はして折角の陶醉を醒ます樣では勿體ない氣がせぬでもないが、恰度今晩は「ラヂオ」で竹本米太夫が、艶容女舞衣三勝半七酒屋の段を語つて居るから、急に思い立つて此邊からボツ〳〵お慰に陳べて見やう。

艶容女舞衣の實說

此解剖のメスを揮ふに當つて第一に困つたのは當の半七は三十四歳であつたが生憎獨身者であることだ、イクラ晩婚と云つても昔の家庭で此の年齡迄獨

身で居る樣では何か家庭の事情が結婚を許さなかつたのであらうが、兎も角無妻であつた事は彼が最後の折の書置三通に徵して明瞭過ぎる位だ。依てあの貞節無比理想的女房の標本として後世の金棒曳き女子を愧死せしむる程のあの有名なお園の存在が全然否定されるのは此院本の半部若しくは全部を沒却する事になるが如何も仕方がない、「笠屋三勝半七二十五年忌」でも「浮名茜染三勝五十年忌」でも又此女舞衣でも半七に女房があつて「二十五年忌」ではおすがと云ひ「五十年忌」からお園に改めたが何と云つても確實に無妻である、從つて「コレハ〳〵宗岸殿」も架空の爺さんである。それからもう一人亡くなるのは半七は母親ばかりで父親にはズット前に死別して居るから「イヤソウジヤナイ昔し唐にも例がある太公望とやら云ふ人が」と澁面作り、頑固一徹の半兵衛爺さんも居ない人間だ。あの頑固な爺さんがあつたり貞淑の龜鑑お園があつたとしたなら半七もマサカ亥の年霜月なぬか、露と消え行く夜明の烏、後の世に迄歌はれんでも濟んだであらう。



彼には母親の外に三人の姉は他に緣付き家には五郎八、キヌの弟妹がある。

そこで酒屋の段では陽氣であるが實際は大和五條の豆腐屋である、御簾内から黃色い聲で三勝半七豆腐ウ屋の段では落語の高砂ウ屋を想ふて吹き出させる。

『そなたに別るゝ半兵衛はよくよくの不仕合、いなせとむない返しとむない、とは思ひど此處に置けば此儘若後家、おりやそれがかあいゝいとしうござるわい』と泣き落す老人も嫁の手本のお園も實在した事實はない。

書置といふ證據にはグーの音も出ない。元祿八年十二月の七日攝州は西成郡難波村字サイタラ畑で男女の心中があつた、此の邊は千日の墓地で寂しい處だ、二人の死體は茶色木綿の布子を敷いた上に倒れて居た。

男は年齡三十四五、郡内縞の綿入れに紬の帶をしめ皮足袋をはいて居る。

女は二十四五、日野媒竹小紋に日野茶の裏を付けた綿入に、郡内縞紫裏の下着をかさね、木綿足袋をはいて居る。

此男女がめい〳〵に着て居た衣物の褄と褄とを紅絹裏のついた縮緬の帛紗で堅く結び合せて居る、(是點が此心中の特徵で世間から噂の語り草となつた)

刃物は糸卷櫛燒付金具、鋼の刄櫛にこづかのついた二尺一寸の脇差で死體の傍に落ちて居た、發見した村民は早速下難波村の代官所に届け出た、代官辻彌五右衛門は關口條左衛門渡邊爲衛門といふ手代兩人を現場に差遣はし死體檢死身元を取調べると男は、

大和國宇智郡五條新町の赤根屋半七　女は

大阪長町美濃屋平左衛門の養女サン

である事が知れた。

其死因を取調べると院本では半七が遊蕩費に困つた果て『一昨日の晩山の口で善右衛門を殺したは酒屋の半七』と殺人罪を犯して居る、其善右衛門が假令國元にて用金を盜みし盜賊でも人をあやめて金を强奪したとあつては天下の艶男半七の爲に其寃を雪いでやらなければならない、斷言す豆腐屋半七は決して殺人犯ではない跡方もない浮說である、唯刃物持たずの方は保證の限りに非ずだ。閑話休題、三勝は大阪島の内の笠屋に店假をして居た垢摺女なので實際は遊女であるが島の内は岡場所だから垢摺女と呼ばれて居た。此の三勝も亦父親はなく母親ばかりそして長町四丁目荒物屋市兵衛の借家に住んで居る美濃屋平左衛門の養女であつた。半七が商用で上阪した時の折々に三勝と相狎れ、次第に募る戀の道惚れて惚れられたお安くない仲となつたが元來三勝にはおつまと云ふ女兒がある、此のおつまは即ち『おつうにめんじ』のおつうであるが是が又半七と馴染以前に出來た娘で半七の子ではない、三勝は非常に此の娘の事を苦に病んで居るが、半公は三通の書置

きがありながら一言もおつま即ちおつうの事を云つてゐない、正直の男だ。

大體半七は年こそ多いが戀にはうぶい方で三勝の方は商賣柄色戀の道には洗練されてゐて己に半七以前におつうが出來た位だから戀には若い半七にはぞつこん參つたのである、かうした譯でツイ獨身者の半七のはまりも強く、逢瀬の度重なれば所謂廊の金にはつまるが習ひ、書置にもある通り『私もしんしよ仕果たし候ふて我所に顏差出し候事、近頃恥かしく何事も〳〵戀と貧との二つからかく淺間敷死を遂げ參らせ候』とあるに徵しても家道を支持し眷族を扶養すべき身を以て放蕩の爲に餘裕もない身代を傾けたのを恥ぢて居る。半七は色と酒との放蕩費の外に又三勝の實家に多少の給與をしなければならず、養父の美濃屋平左衛門は三勝を喰物にして居るのであるから二人共重荷を背負ふて居る、殊に三勝にはおつうと云ふ遊女渡世に似合はぬ兒の梏桎がある、『殊に未だおさなきおつま事生れ出るより他人の手にかけ親とも子とも知らせもせず又もや他人の手に渡しふびんの有樣見るならば生がひあらじと存じ』と實に斷腸の思を書き殘して居る。

其處でそれ程ならば半七は獨身なりどうで豆で稼いだ體、三勝は豆腐屋へ嫁入りすればいゝにと岡燒せざるを得ないがどうも當時者間の身になると矢張り他人の思ふ樣に行かないのは今昔共に變りがない第一おつまの始末に困る、養父の供給も出來ない、半七の母親は承知させても親族達は不同意だ、三勝が書置にも『半七母樣成程合點には得共あの方の一門衆よりかうした事と知らず是非〳〵至急半七殿に女房を持たせ、持たずば勘當せんと一門皆々申さるゝよし』とあり、よし一度は思ひ忍びて嫁入したとしても何分末遂けられやうと思はれぬ、さればとて切れて他人になるべく餘りにも惚れ過ぎて居る、菩提の鹿は招け共來らず、煩惱の犬は追へども去らずどう思案し返しても十方彌陀の淨土を慕ふ心になつて死を選ぶより外ないのである。

心中と相場のきまつたは八月である、然し三勝が此の世を去らうとするには差詰め美濃屋が立ち行かない、現今のモボやモダがトンカツで費つた金に苦しんでニヤン死するとは少しく違ふ。三勝が義理の柵に苦しんで居るのを見ると半七は氣が氣でない、今にも死なゝければならない身でありながら女の死後の金策をする氣になつた、併し此處が三勝の上せ上つた半七の買ひ處であらう、和歌山や池田やら四ケ月も駈け廻つたが融通の出來よう筈はない、氣の拔けた樣の男の姿を眺めて三勝は自分故にあの苦勞と取すがつて血を吐く思ひで泣いたであらう、思ひやるだにハゝゝ馬鹿々々しい。

心中には南無阿彌陀佛に限つて居る樣だが古來心中する者が淨土宗と眞宗にだけ極まつてるものではない、半七の書置の末に『まさかの臨終正念成佛あびらうんけん〳〵と涙ながらに書殘し居候』とあるけれども眞言宗天理教では芝居にならぬ、此上は亡き後の御念佛南無阿彌陀佛〳〵〳〵と三勝が院本に書殘されて居る。

三勝半七の墓は情死した場所に極く近い千日の奥の火屋の前東側西向に建つて居る、碑面には

嵐雲月照信士、　月雲妙霜信女

として臺石に杉山助左衛門、施主花井あつま、座元岩井重四郎と彫つたのはサイタラ畑の心中の後七年目に岩井座で杉山勘左衛門(茜屋半七に扮す)花井あつま(三勝に扮す)等が歌舞伎座に取り立て大當りを取つたから亡き兩人の爲に建立したのである。それで此實說を土臺にして艶付脚色したのは

紀海音が「笠屋二十五年忌」を書いたのが

寶永六年八月、實際は心中後十五年目

春草堂が「浮名茜染五十年忌女舞劔楓」の出來たのが延享三年十月、實際五十四年目

竹本三郎兵衛が「艶容女舞衣」を作つたのが

寶永元年十二月、八十年目に相當する

どの作者も皆お園の父親宗岸をつかつて親子聟嫁の至情を痛言し纖巧を極めたお園の夫に對し兩親に對する心情を盡して聽客を涙なしには聽かしめざる作者の腕に至つては事實の有無など論ずべき限りでない、此お園なしには三勝半七などは遊治郎の乳繰言に過ぎなかつたであらう、とすれば架空の貞女の龜鑑お園孃に對して充分の敬意を表して筆を擱く。

(此項終)

佐太村と念佛

中野三允

菅原傳授の「佐太村の段」は南無阿彌陀佛を以て終始してゐる。語り手が巧みであると聽く方もツイ其調子に引き込まれて、口の内で「南無阿彌陀佛」を繰り返したくなるのだ、南無阿彌陀物を稱へるは佛敎の方から專門的に見れば、即ち「稱名念佛」である。彼の說敎節の起原は弘法大師が、佛敎を擴める爲に創められたと言ひ傳へられてゐるが、佐太村は說敎義太夫の雄なるものだ、そこで一体念佛とは如何なるものか、專門的に會得して置くと語るにも聽くにも一層身が入つて、眞實味が增すからして、左に簡單に說くことゝする。

先づ念佛を分て三とする、口に佛の名を稱ふる、所謂稱名念佛、靜座して佛の相好功德を觀念する所謂觀相念佛、佛の法身實相の現を觀ずる所謂實相念佛之れである。それから惠心著の「往生要集」と云ふ書物では念佛を四種に分つてゐる。一に定業念佛即ち觀相念佛、二に散業念佛即ち稱名念佛、三に有相念佛即ち定業念佛と散業念佛を兼ねたるもの、四に無相念佛即ち實相念佛である。從つて念佛には南無阿彌陀佛を稱へなくとも、彌陀の姿や理法を觀念する方法も又念佛たるを失はぬ、が彼の淨土門で主として勸めるのは、稱名念佛即ち行住座臥佛の名を稱へて止まぬ散業の念佛でなければならぬ。而して念佛の佛は諸佛に通ずるからして、彌陀以外の佛名を稱へてもよい譯だが、大乘說では獨り阿彌陀佛に限るとされてあるのだ。

念佛即ち彌陀の名號を稱へて、淨土往生を願ふことは、唐の道綽、善導の弘通する所で、我が國では惠心（天臺宗僧）も弘通者であつたが、宗をなすに至つたのは、永久五年良忍が、融通念佛宗を開宗し、次で永久四年法然により淨土宗、元仁元年親鸞に依り淨土眞宗（眞宗）、建治二年一遍に依り時宗が開宗されたのだ。

そこで稱名の上につく「南無」の二字は阿彌陀佛を呼びかけることで佛敎に限られてる用語の如く普通にはなつてるのだが、別に南無は英語のネームと同一語源から來たのだと說をなすものがある。すると名古屋人種が語尾に「ナモ」をつけるのも多少の關係があるかも知れない。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

佐太村は虻の唸りも念佛かな　三允

（附記）第十回東都五十義會大會の二日目に此佐太村が出た、語り手和玉、絃桑造、南無阿彌陀佛の語り分けに努力は其勞を多とするが、審査を受ける場合の語り物として損な出し物に思はれる。尤もそれはそれとして採點されるから、結局差別はないものともいひ得るけれども。

紅綠會短評

芳河士

▼沓掛村●●（三八）から聽く、馬方の呼聲は低い聲だが、それで大向ふのどこまでも通る。これがほんとうの腹から出る呼聲といふのだらう、此の調子を忘れぬやう望む。慶長の笑ひもよし、總じて落ち付いて居つた。

▼鳴戸●●（お弓福子、お鶴森江）聞いてびつくりお弓はとりつきから、斷腸の思ひは充滿し、今こゝで親子を名乘つては危い二人の命が、又子にまで懸つて來る、名乘つて憂目を見せるよりも、名乘らず此のまゝ歸すが却つて此の子の爲であらうと決心をして、離れがたなき憂き思ひの別れに至つては、本文章中の絕唱であると共に、更に血の滲む哀れな情景を感じた。お鶴もよし。お鶴は家をしぶりがちに出て、振り返り振り返り花道の七三で詠歌を唱へて、苦のやうな合掌をして去るあたりが、髣髴と眼に見えた。（見れば見る程胸せまり……の處にて三味の三がばたりと下り、アッと思ふ間もなく直ぐに引上げて、少しも聽き苦しくなかつたその猿三郎の態度を讃す。）

▼安達●●（森八）聲に張りもあり、全般を通じて巧妙ではあるが、少々癖のあるのが惜しい。（四月二十八日夜小石川倶樂部で掛合の岩永を聽いたが、これは又少しの癖もなく上々の出來であつた。）

▼毛谷村●●（源平）すら〳〵とラクに語つて面白く聽かせた。嘗て私は、中車の六助に雀右衛門のお園を見たが、もう一度雀右衛門のお園が見たい、その雀右衛門は死んでもう好きなお園は見られないなどゝ當時の舞臺から役者を回想した、此舞臺から役者にまで回想し得たことは、筋もよく、それだけ情味も豐かに動く源平の技倆と云つてよい。

▼桂●川●（掛合）一同熱心な鍛練振りを眞ふ。

先づ意表に出でよ

田畑大有

太棹！　これだ、こうこなくてはいかん。

古今を通じ洋の東西を問はず、偉大な成功した者は、その行爲が凡て人の意表に出てゐる。

一寸見たところでは、頗る平凡であるが、其の成功の跡を靜かに探索する時、その平凡振が至つて意表に出た平凡であることを發見する。

或商家の主人が店員達の才能を試すべく、一日仮裝競爭をさせて見た。但し仮裝には「人目を引き印象を深く殘すこと」といふのが條件であつた。店員達は今日こそ主人に我が才能を知らしめんと或は袴の武士に、或は鎧兜の威しき武者に、或は緋の袴を著した官女にと樣々に知慧の限りを絞つて工風を凝した。

その中に一人何の仮裝もせず只眞紅な手拭で頰かむりをし、七三に裾をからげておどつて出た者があつた。しかもそれが一番人目を引き且つ印象を深からしめたので當日の一等賞は遂にその平凡な店員が獲得した。

義太夫雜誌の題名に「太棹」とつけたのは恰度此の平凡の店員に均しい意表に出た題名である凡そこれ程平凡な題名はザラにはあるまい。普通有合せの考では、太棹といふ言葉が雜誌の題名にならう杯とはつゆ思ひもよらぬ言葉である察するにこれは餘程太棹界の苦勞人であり且つ相當に決心を持つた人が付けたのであらう。

聞けばその內容も、全く從來の形を破つて意表に出る模樣であるが、どうかそうしてもらひたい。尠くも小生はそうあらうことを祈る。

今日は太棹藝術末世とも云ふべき時代だ。此の末世を救濟するのには、凡てが意表に出たやり方でなくてはいけない。希くば號を重ねる每に此意氣でやつて欲しい。太棹は日本音曲の根締だ。若し我日本の國を音で現さうとしたならば此の太棹の音より他にはない。小生は太棹振興の爲に「太棹」の發展を祈る。そして意表に出た「太棹」に更に意表に出づることを欲して己まない。

捨小船

金川文樂

とう〳〵ひとりぼつちとなりました。

晩秋の淋しき夕、帝都に於ける義太夫界の人々に厚き同情を以て送られて以來、指折れば早や足かけ四年です。義太夫修行の爲に浪花の地に於ける私の辛慘は實に言語に絕しました。

けれども、だめでした。遂にだめでした。私の義太夫藝術が藝術として幾分の末來を認めたのは唯私の自惚に過ぎなかつたのです。

大阪についてその日から、私は修行にかゝりました、幸ひに義界一流大家の指導も受けました。火の出るやうな、血の出るやうな、涙の出るやうな荒修行は約一ヶ年續けました。その結果先輩の大部分から受けたる言葉はどうでせう、只冷笑と罵倒と恥辱だけしか頭に殘りませんでした。それのみならず、行動に對して樣々な迫害まで蒙つたのであります。

絕望！、さうです、私は遂に絕望の淵に苦悶することになりました。

「白痴め！、オイ、おだての馬のお客さん！　自惚の親方さん！　未だ目が醒めなかつたか！」これは私の理性の叫びです。

「お前の生きる道は他にある。何！　藝術で生きたい？　それはよい、それはよいが、藝術は義太夫より他かにないと思ふか。お前の考へは小さい、狹い、固陋だ、それ、それ、お前の聲は何に適する、お前の精神は何を望む、お前の最初の目的はどこへやつた、民衆は今何を欲求してゐる。よく分る面白い義太夫を欲求してゐるではないか。そこに目を注ぐ時、お前の今日までの苦勞は皆生きて來る」。これは私の又別な理性がさゝやきました。

けれども義太夫を進化させる抔といふことは、到底私如き微力なものに任ずべきでないことを知りました。唯義太夫を基礎として、私だげの、私の力で行はれるだけのものを別に考案することが、私のほんとうの任務であると自覺して、早速先輩に圖つた

處、何れも其心を以て同情し援助して下さいました大阪の新聞は、私の創案に對し「語劇」と呼び、或は「金川節」とも傳へてくれました。そこで私は「語劇金川節」と自稱してゐます。

大阪の公會堂や、朝日會館放送其他京阪の數ヶ所で試演をやつた結果、どうかかうか自信だけはつきました。しかし彼岸までには甚だ遼遠であることを承知してゐます。まだ〳〵、これからです。全身血みどろになりながらも、得べき何ものかの影を認めたに過ぎません。

私は世に發表すべき何者も持ちません。殊に義太夫に關する雜誌抔に書くべき資格もありません。だが、太棹から生れる藝術は私の精神です、また太棹は私の最も懷しい慰樂です。

伏して呑む清水や朝の山のぼり

清水五句

（舊作）

芳河士

待ちぼうけた叔父は日蔭の清水に立つとる

女等を清水までは汲ます

清水にひやされたもの皆が覗きゆく

登山三たびいつもの清水だ

清水でとつた花が家の前まで來て捨てられ

祝詞と希望

柳

義太夫專門雜誌『太棹』の創刊に滿腔の祝意を表します。

衰退した義太夫の興廢は現在の弊を一掃すると否とに在る。玄人は研鑽を忘れて藝人根性にのみ趨り、素人は自我增長して師を輕んじ旦那藝に甘んじてゐる、自殺である。

炳乎たる義太夫の名文美句には掬み切れない情調や性格が溢れ含まれて居る。其一段を素讀暗誦し咀嚼消化したる後各師に就いて節まはしを始め總て義太夫の約束を踏んでこそ大成するので、徒に段數を讀み上げても何の傲りはない。師匠としては遊惰安逸を事とせず、研究を盡くし後進を鞭韃して、情實や物質に假借せざる覺悟を要するのである。

貴社の生長は果して此使命を全うし得るや否哉、切に其自重を祝福する所である。

川柳初松魚の會

目には青葉山ほとゝぎす初松魚――食通の味覺をそゝる松魚の味は今が一番、青びかりの潑剌たる肌のつや〳〵しさ、尾ひれのピンとした姿は江戸つ子氣象の象徴である。古川柳にも『初かつを伊勢屋の前を通り越し』としみつたれた笑つてゐる。

その初松魚の會が川柳久良岐社の主催で、九段の大周樓で催ふされました。當日の席上吟を左に紹介致します。

鎌倉の昔は松魚今はハム　久良岐

割烹着初松魚とは出かしたり　東魚

初松魚喰に行きたし三百里　大阪柳屋

初松魚九段の坂でよみがへり　方南

初松魚五日は江戸に成すまし　綠石

米櫃が空になつても初松魚　一良

初松魚始めて江戸の味を知り　輝美女

震災を屁とも思はず初松魚　鞍馬

初松魚江戸の匂ひよ其色よ　節堂

初松魚つゝじの前に飾られる　十九樽

川柳は讀めないけれど初松魚　緣石

榮龍が來て初松魚いきて見え　麻子

椋鳥が歸つて行けば初松魚　對州

初松魚くじに當つて持餘し　明女

小波の句へ落のくる初松魚　慶女

藝界寸話

＊

猿之助、苦沙彌先生でスッカリ髭をいぢくる癖が付いてしまひ、樂屋でもありもしない鼻の下に手を持つて行つては、ハッと氣が付く、そばに居た男衆、見て見ぬ振りをしてクス〳〵。

＊

昔なら「木戸まで急用」と怒鳴る所を、此頃は萬事文化式となり幕間に紙がはり出される。ところが明治座では出る紙〳〵悉く「京都の何さん」「下の關の何さん」に吃驚終ひには「朝鮮の何さん」に吃驚した見物「飛行機にでも迎ひに來るのかな」。

＊

大國座の國太郎、皆樣のお目通りで大つぴらに女からくどかれる色男は、マアわたし一人でせうと云ふ、何故と云つたら、辨天小僧の神輿ヶ岳で、國太郎の役が千壽姫、それをくどく辨天小僧は女役者の歌扇、なァる程。

＊

旅から今の壽座まで今年になつて三ヶ月も「良辨杉」を出し通してゐる新之助、少々良辨ダコの氣味に當人も氣がさし、今度は一つ氣を變へたものを演つて見たい、さて何にしたものだらうと考へながら樂屋の用便所へ入つた新之助チエッ、こいつあ辻占が惡いや、此處にもりやうべん所と書いてあらァ。

＊

壽座では先代萩に雀が出る、丸橋に犬、良辨杉で大鷲が出る、五人男には何んにも出ないかと云へば、榮舛曰、濱松屋で私が鳶に出ます。

＊

今年にはいつてから先づ水滸傳の虎を先頭に、大菩薩峠のムク、吾輩は猫であるの猫、引續いて公園劇場の「サーカス」では熊や馬や鷄や鳩、更に仔豚から兎まで出る。それに孤忠信、駱駝と四足の當り年ですね。

太棹俳壇

芳河士選

夏雜題

牛吼る草の卯月の夕かな　冬扇
初夏や朝寢してゐる嵯峨の宿　義友
七浦の船みな出でぬ五月晴れ　悅郎
五月雨養魚池に鯉を放つ人　一心
山陵の青葉かくれや時鳥　蓬州
驛に入れば早や灯る酒肆夕若葉　浮草
夏淺し馬場に虫這ふ金の鞍　竹風
夕立に牛急がせる暇かな　巨浪
桐咲くや家まばらなる開墾地　淋果
葉櫻や弦をはなれし矢の唸り　標堂
月させば稍遠のいて鳴く水鷄　千古
筍の盜まれしあと數へけり　松翠
院の灯の明け殘りたる新樹かな　竹山
五月雨に鏡の曇る樂屋かな　天籟
甲冑の由來聞けり土用干　緣葉
紙燭して刀研く夜や時鳥　一要
島の火事の江に照り返り若葉かな　碧牛
親方のくはひ揚枝や初袷　大波
連れ立て涼しき肩と肩かな　秋楓
蚊帳吊てから出て行くや風呂貰ひ　晴流
値も言はず置いて走るや初松魚　春朝
青簾戀に泣く姫うら若し　鶴遊
五月雨や仕樣事なしの膝枕　不苦
髮結ふて涼しき合せ鏡かな　柿居
牡丹一輪崩れて狹き机かな　池月
背負ふ子と物語り行く日傘かな　悟人
夜嵐の吹くや螢の川ほとり　北星
神風の吹かぬ日はなき青田かな　見山
夜汽車待つ頃崩れたり雲の峰　文朗
夏山や雲の中なる鳥の聲　一蝶
川風にふくらむ鯉の幟かな　花舟
夕立の名殘りの露に入日かな　修造
夏の月燈臺守と語りけり　柳々

□謝告

本誌發刊に際し「祝發刊」廣告掲載方をお願ひ致しました處、早速御快諾下され難有御禮申上げます。締切後の申込は勝手乍ら次號にまはさせていたゞきました、どうぞ惡からず願ひます。

□募集

■短評――毎月各寄席（玄人素人に關はらず）義太夫會短評。

■俳句――題（夏雜）一人十句以内。

（〆切毎月十五日―用紙隨意）

□義太夫界消息

次號から消息欄を設けます。移轉改名、其他の異動を御遠慮なく御通知下さい。

編輯後記

芳河士生

▼創刊號には充分の準備がありながら、其實行を捗らせる事が出來なかつたのは遺憾であると同時に自恥の念に責められて居ります。それも畢竟三越の義太夫會等の努力にエッキスを奪はれたのが最大原因ですが、何れにしても斯道の爲に盡した事に易りはないと云ふ丈が聊か慰める所であり諸君も亦諒とせられるでありませう。

▼名士の義太夫觀、豊澤松太郎師秘藏の「松のみどり」は他の追隨を許さぬ獨特の讀物であります。次號からはいよ〳〵有名な「鵬鵡が杣」に入り、逐次各丸本の節づくしを掲載する順序です。近松翁の遺像や花押も次號には誌上に上せられます、是に依て筑後椽の門弟にどんな人があつたか、其の人名や古い演題等が展開されます。

▼田村西男氏、平山蘆江氏の原稿はいたゞく筈でしたが締切の間にあはず、次號には是非共いたゞくことになつて居ます。なほ次號からは三宅周太郎氏も執筆さるゝ事になつて居ます。同氏は文樂物語編纂のため上阪、深刻に文樂の今昔を調査されました。同氏の寄稿は本誌錦上の花であります。

▼本誌發刊に際し、祝詞を賜はりたる諸君を始め、多大の援助を與へられたる柳氏及び同好諸君に深謝致します。

――五月二十一日――

太棹社 義太夫會 第二回

會場　三越ホール

時日　六月一日午後〇時半

本社は豫告の如く「太棹」に共鳴の各位後援の下に、最も清新にして權威ある義太夫會を時々催すべく、其一聲を三月十九日、三越ホールに於て擧げた事は、愛好諸君の熟知の通りであります。

今日までの義太夫會は、我まゝが過ぎ研究といふ大切な仕事を忘られてゐるやうであります。第一にこれを改め、次に語り物も自我を離れて民衆的に選定しなくては、斯道は衰微するばかりであります。

本社は此の弊を捨てゝ、人選は不偏不黨、回を重ねるにつれて、玄人は勿論、女義或は義太夫藝妓等あらゆる方面から人選して、この國粹音樂の價値を民衆的に普及し、大方諸彦の批判を仰ぐべく、最善の努力を拂つてをります。

今回その第二回義太夫會を、來る六月一日午後〇時半より三越ホールに於て開催する事になりました。當日は萬障御繰合の上是非々々御來聽御批判の程偏に願上げます。

■入場券は本社へ御申越次第贈呈●ホール（六階）の入口にても呈上。

番組

安達銀水　絃　八十八

帶屋春和　絃　道之助

酢屋一朝　絃　司好

赤垣文久　絃　廣兵衛

忠九二樂　絃　猿之助

以上

▲時間は定刻に開演

御註文の洋服は

神田區金澤町四番地

高級裁縫
親切叮嚀

工藤洋服店

『太棹』愛讀諸彦に限り一割引。御一報次第參上可仕候

中野

痔座藥

定價一瓶 金五拾錢

▼イボ痔、肛門靡爛、脱肛痔、烈痔、痒痔、痔出血痔の藥によし。

東京市小石川區關口町六五

發賣元 中野藥學實驗所

電話牛込一七二三番
振替東京三六五一六番

定價		廣告料	
一部	金參拾錢 郵税二錢	普通	一頁 金貳拾圓
六月分	金壹圓七十錢 郵税共	特別	一頁 金五拾圓
一年分	金參圓 郵税共		

六月創刊號 毎月一回一日發行

▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増、但し一錢切手の事

昭和三年五月廿九日印刷納本
昭和三年六月一日發行

東京市小石川區表町一〇九
編輯兼發行人 富取壽鹿

東京市牛込區東榎町七
印刷人 田邊重光

東京市牛込區東榎町七
印刷所 一誠堂印刷所
電話牛込五一九一番

東京市小石川區表町一〇九
發行所 太棹社
振替東京三一七八五番
當分の間富取壽鹿名義

祝發刊

□上棟式、園遊會、遠足、御佛事等には折詰辨當。
□おさらひの御催し、御會議には重詰辨當。

東京市京橋區采女町貳拾八番地
歌舞伎座前

辨松總本店 玉井仙太郎

電話銀座 二〇九番 四七二番 九六四番

自宅 京橋區築地二丁目五番地
電話京橋二五六番

□經費節約は復興の第一歩なり。

お買物は三越へ

御地より御手紙にて
御注文の際は「三越
呉服店通信販賣係」
宛御用命を願上ます
カタログは無代進呈

東京市 **三越呉服店** 駿河町